中学生の身長に対する認識と成長曲線からの検討

The recognition of stature and growth curve of junior high school students

鈴木　明子　・　岡田加奈子　・　上原すゞ子
Akiko SUZUKI, Kanako OKADA, Suzuko UEHARA

Summary

The purpose of this study is to clarify the recognition of the stature in the junior high school students in puberty, and to investigate the influence on their recognition for stature by defference in process of growth in height.

Main finding as follows.

1) A lot of the junior high school students underestimated their hight.The students who experienced late growth spurts were particularly displeased with their physical stature.

2) Females students worried when their physical developwent was faster than average, where as male stu sents were concerned when their growth was later than average.

3) Students' self-esteem was not adversaly affected by late development.

1．はじめに

思春期は子供達にとってめまぐるしい身体発育の時期である。体への関心も高まる一方で，発育のスパートがかかる時期は個人によって異なり発育度合いも様々であるため，発育が遅れたり早くなりすぎる場合など不安感を持ち，悩みの原因になることが多い。容姿や体型に関する悩みは思春期の自我発達に伴って大きな劣等感として固定化することも起こり得る。特に身長は，外見上明らかであるし自分でコントロールができない点で悩みも深刻になりがちである。本人の意識には最終身長のみでなく発育過程が大きな影響を及ぼすと考えられるし，そのような時期に発育の個人差を理解しておくことは重要である。また，日本人の体格は欧米人型に近づいており，時代とともに身長認識が変化してきている。現在の中学生がどのような将来的身体像を描いているのかをふまえておくことは身長発育に不安を抱える者への理解にもつながると考える。

そこで，成長期である中学生が持つ身長に対する認識を知り，発育過程の違いがどのように本人の意識に影響をあたえているのかを考えてみた。さらに，結果を考慮した上で身長発育に不安を持つ生徒に対し養護教諭がどのように関わってゆけばよいのか検討してみた。

Ⅱ．対象および方法

対象は千葉市立Ｔ中学校２年生 198名（男子 103名，女子95名）である。なお，以下のＡＢの対比は両データのそろった 192名（男子 100名，女子92名）を対象とした。

Ａ．方法は記名選択肢式（一部記述式）質問紙調査法とした。内容は現在の身長，身長に対する自己評価，最終理想身長，現在の身長の満足度・不満な理由，座高に対する満足度，身長が最も伸びた時期の把握度，身長発育時の不安感・羞恥心・孤独感の有無，他人との関わりにおける身長差，魅力としての身長，本人の性格，自己への好感度などである。

B．小学１年生から中学２年生までの身長の測定値を健康診断票から転記し月齢を加味し，縦断的成長曲線・成長速度曲線を作成した。成長曲線は千葉大学付属病院小児科で使用している用紙（標準偏差スコア法による発育評価）に記入し，７歳，10歳，13歳の時点でどの標準偏差（ＳＤ）区分帯に属するかにより分類を行った。また，成長速度曲線より発育ピークの有無を読取り，最大発育量とピーク年齢を発育評価のＳＤ区分帯にしたがって分類した。図１に示したように-2SD以下を－２，－2SD～－SDを－１，－ＳＤ～平均値を－０，平均値～＋SDを＋０，＋SD～＋2SDを＋１，＋2SD以上を＋２，発育ピークが起こっていない場合は未発現とする。

Ⅲ．結果

１・身長に対する自己評価および理想身長について（表１）

現在の身長に対し５段階（低い，やや低い，普通，やや高い，高い）で自己評価をしてもらった。自己評価と現在の身長のＳＤスコアとの関係を示したのが表１である。±０群に属する者は年齢に則した標準的な発育に最も近いといえるが，－０群では低いと評価する者がかなりいた。自己評価を低い側につけている回答が多く，特に男子でその傾向が強い。

実現可能か否かは別として理想身長をあげてもらったところ，平均値は男子 178.5cm，女子 164.8cmであった。実際の身長と理想身長の相関係数は男子0.39，女子0.34であり，相関は弱いといえる。

全体の中のどれくらいに位置したいかを５段階（低い，やや低い，普通，やや高い，高い）で回答してもらったところ，男子 103名中47名（45.6%），女子94名中40名（42.6%）がやや高い位置を望み，次に普通の位置を望む者が多かった。高い位置に関しては男子ではかなり希望する者が多いが，女子では比較的少なくやや低い位置を希望するものと同人数であった。

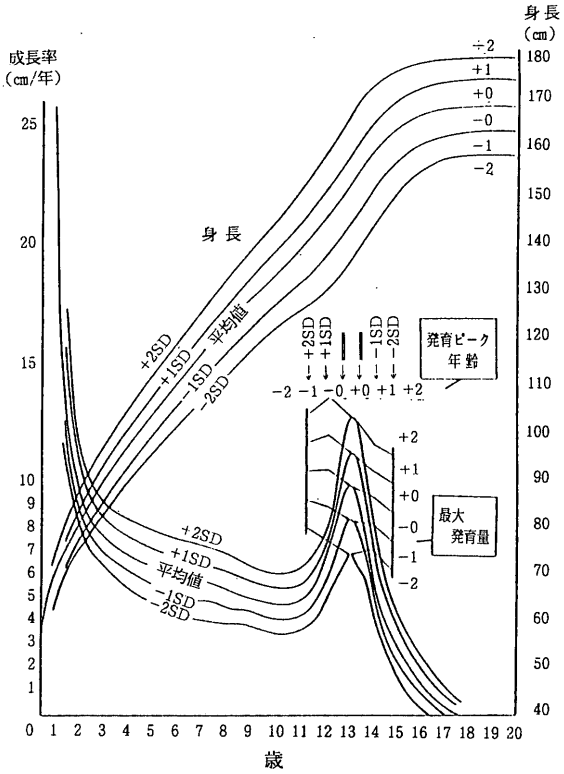

図１・男子の成長曲線，発育ピーク年齢，最大発育量のＳＤスコア分類

表１・中学生の現在の身長に対する自己評価（a）と現在の身長（b）

＜男子＞

b＼a	低い	やや低い	普通	やや高い	高い	計
－２	0 (0.0)	1 (1.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (1.0)
－１	7 (6.9)	2 (2.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	9 (8.9)
－０	16 (15.8)	9 (8.9)	4 (4.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	29 (28.7)
＋０	1 (1.0)	7 (6.9)	19 (18.8)	8 (7.9)	0 (0.0)	35 (20.8)
＋１	1 (1.0)	1 (1.0)	6 (5.9)	9 (8.9)	4 (4.0)	21 (5.9)
＋２	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (1.0)	2 (2.0)	3 (3.0)	6 (5.9)
計	25 (24.6)	20 (19.8)	30 (29.7)	19 (18.8)	7 (6.9)	101 (100.0)

＜女子＞

b＼a	低い	やや低い	普通	やや高い	高い	計
－２	0 (0.0)	1 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
－１	11 (12.0)	1 (1.1)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	12 (13.0)
－０	9 (9.8)	13 (8.9)	4 (4.3)	0 (0.0)	1 (1.1)	27 (29.3)
＋０	1 (0.0)	6 (6.5)	18 (19.6)	9 (27.3)	0 (0.0)	33 (35.9)
＋１	1 (1.1)	0 (0.0)	1 (1.1)	7 (7.6)	8 (8.7)	17 (18.5)
＋２	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (1.1)	2 (2.2)	3 (3.3)
計	21	20 (21.7)	23 (25.0)	17 (18.5)	11 (12.0	92 (100.0)

2・身長に対する満足度について

現在の身長に対しての満足度の割合を調べたところ，男子においては 102名中59名（61.8％），女子では95名中55名（57.6％）が不満である（どちらかといえば不満，不満，非常に不満）と回答した。現在の身長のＳＤスコア別に満足度の割合をみると身長の低い者ほど不満度が高い結果が得られた。

満足な者，不満な者それぞれの発育ピーク年齢について調べた結果，男女共，スパートが遅い者は76.9％，75.5％とかなり高い割合で不満を持っていた。顕著な点は，スパートが早く起こった者についてである。男子においては不満を持つ者が58.3％とやや多い程度であるが，女子は90.0％と圧倒的に不満を持つ者が満足と回答する者を上回っていた。

表２・中学生の身長に対する満足度と成長曲線の区分帯移動の割合

	満足度＼区分帯移動		上昇移動	変化なし	下降移動	計
男子	満足	人数 (％)	18 (41.6)	14 (35.8)	7 (17.9)	39 (100.0)
	不満	人数 (％)	13 (20.6)	41 (65.1)	9 (14.3)	63（上昇・下降と重複2名） (100.0)
	計		31 (31.0)	55 (55.0)	16 (16.0)	100 (100.0)
女子	満足	人数 (％)	13 (34.2)	25 (65.8)	0 (0.0)	38 (100.0)
	不満	人数 (％)	16 (26.6)	34 (56.6)	10 (16.6)	63（上昇・下降と重複6名） (100.0)
	計		29 (31.5)	59 (64.1)	10 (10.9)	92 (100.0)

成長曲線は同一区分帯に沿って発育するのが一般的であるが，思春期においては区分帯の上昇移動や下降移動が多くみられる[1]。そこで，満足と回答した群（以下満足群とする），不満と回答した群（以下不満足群とする）に分け，成長曲線上の７歳，10歳，13歳の時点でＳＤスコアによる区分帯移動の有無について比較したところ表２の結果を得た。男女とも満足群は不満足群よりも区分帯の上昇移動をした者の割合が高い。

不満群 117名のうち女子３名は「低くなりたい」と答えているが，残り男女114名は高くなることを希望していた。高くなりたいと思う理由として，中学生であることから背が高いと部活動で有利であるとの回答が男女共に多く，かっこ良さ，洋服の選択の広さ，便利さをあげる者もいた。逆に，低くなりたい理由としては目立ちたくないとの回答があった。

3・身長の伸びに対する把握度について

身長の発育ピークを迎えるにあたって，本人が身長の伸びをどのように自覚しているかを調べた結果，著しく身長が伸びた時期を自覚している者は，男女とも55.2～3％であった。

把握度合いを最大発育量のＳＤスコアにより検討したところ，平均値以上の伸びを示した群（＋0～＋2）では男子73.6％，女子70.0％が「伸びた時期をはっきり覚えている，だいたい覚えている」と答えており把握度が高く，平均値以下の伸びであった群（－2～－0）では男子44.6％，女子46.9％であり両者の間には有意差がみられた（$P<0.05$）。

4・身長発育過程における不安について

身長発育に対し不安を持った経験の有無について調べたところ，「身長の伸び方が他の人と違い，気になったことがある」と答えた者は，男子 103名中18名（17.5％）女子95名中30名（31.6％）と，女子のほうが高い割合を示した。

「気になったことがある」と答えた者のうち伸びが早く気になった者は男子１名，女子11名，伸びが遅く気になった者は男子13名，女子14名であった。

「気になったことがある」と答えた者の７歳，10歳，13歳時における身長の成長パターンを表３に示した。変動はあるが，75.6％は７歳時と13歳時において同一区分帯を経過していた。また，発育ピーク年齢と最大発育量の関連について調べ表４に示した。女子２名は発育ピーク年齢が－２群で早くピークを迎えていたが，それ以外は－１～＋１群の範囲に含まれ－０～＋０群内の者も半数を占めていた。

表3・「身長の伸び方が気になった」と答えた中学生の成長パターン

成長パターン			男子	女子	
7歳	10歳	13歳	例数	例数	%
0	0	0	12	18	75.6
0	+1	0	2	1	
0	−1	0	0	1	
0	0	−1	2	0	8.9
0	−1	−1	0	2	
0	0	+1	1	3	11.1
0	+1	+1	0	1	
0	+1	−1	0	1	4.4
0	−1	−2	0	1	
計			17	28	100.0

7歳時区分域を0として、1区分帯上昇を＋1、1区分帯下降を－1、2区分帯下降を－2とする。

表4・「身長の伸び方が気になった」と答えた中学生の発育ピーク年齢の平均値からの隔たり（a）と最大発育量の平均値からの隔たり（b）

a＼b	−2	−1	−0	+0	+1	+2
−2					②	
−1		1	3	①	①	
−0		1	1	3 ③		
+0		4 ①	4 ③	3	1	
+1		1	1	①		
+2						
未発見	6	2	1		1	

○は伸びが早く気になったと答えた者の人数を示す

5・身長差についての意識

思春期には身長のピークを迎えた者とまだ迎えていない者との身長差が著しく，同対象においてもあるクラスでは30cmの差が認められた。自分より身長の高い者と話す時自然と上を，低い者と話す時は下を向かなくてはならない。そこで，発達過程の中にいる子供達が人と話をする場合身長差が気になっているのかを尋ねた結果を表5に示した。男子については，自分よりも身長が高い者に対して相手の性別を問わず気になると答えている割合が高く，低い者に対しては性別を問わず気にならないとの回答が多い。女子については，自分よりも身長が高い男性に対しては気にならないが，女性に対しては気になるとの回答が多く，低い者に対しては気になると回答する者の割合が男子よりも多くなっている。

表5・会話時に身長差を意識する中学生の割合

<男子>

話す相手		気になる	気にならない	どちらでもない	計
身長が高い	男性	29 (28.2)	40 (38.8)	34 (33.0)	103 (100.0)
	女性	28 (33.3)	19 (22.6)	37 (44.0)	84 (100.0)
身長が高い	男性	8 (7.8)	59 (57.3)	36 (35.0)	103 (100.0)
	女性	4 (4.8)	49 (58.3)	31 (36.9)	84 (100.0)

<女子>

話す相手		気になる	気にならない	どちらでもない	計
身長が高い	男性	15 (17.6)	44 (51.8)	26 (30.6)	85 (100.0)
	女性	30 (33.0)	34 (37.4)	27 (29.6)	91 (100.0)
身長が高い	男性	23 (27.0)	36 (42.4)	26 (30.6)	85 (100.0)
	女性	16 (17.2)	46 (49.5)	31 (33.3)	93 (100.0)

6・自己肯定感と身長発育について

中学生くらいになると自己を客観視し始め，単に矛盾を矛盾として感ずるだけではなくこれを自分なりのある一つの原理に基づいて論理的に追求し，否定するような傾向が生じてくると別所は述べている[2)]。思春期の心的特性として自己否定があげられているが，発達の早さや発育度合いが劣等感を生み自己否定に繋がりはしないかと考え，自己肯定感と身長発育について調査した。自分自身を好ましく思っている（自己肯定感）者は男子95名中65名（68.4%），女子94名中39名（41.5%）であった。

最大発育量が小さい群は大きい群に比べ自己肯定感が強い傾向にあり，現在の身長が低い群は高い群に比べ自己肯定感が強い傾向にあることがわかった。

また，表6は自己肯定感とピーク年齢について調べた結果である。女子はピーク年齢が遅い群は早い群より肯定感が強い。男子では現在ピークを迎えている群（+0）は早い群や未発現群より否定感が強い傾向がある。

表6・中学生の自己肯定感と発育ピーク年齢

<男子>

自己肯定感＼発育ピーク年齢		早い← −2・−1・−0	→遅い +0・+1・+2	計
肯定	人数	8	31	39
	(%)	(29.6)	(48.4)	(60.9)
否定	人数	19	33	52
	(%)	(70.4)	(51.5)	(57.1)
計		27	64	91
		(100.0)	(100.0)	(100.0)

<女子>

自己肯定感＼発育ピーク年齢		早い← −2・−1・−0	→遅い +0・+1・+2	計
肯定	人数	8	31	39
	(%)	(29.6)	(48.4)	(60.9)
否定	人数	19	33	52
	(%)	(70.4)	(51.5)	(57.1)
計		27	64	91
		(100.0)	(100.0)	(100.0)

Ⅳ．考察

自分の身長に対して自己評価を低い側につける傾向は青山による中学生・高校生を対象とした調査結果[3)]，大学生を対象とした調査結果[4)]と一致する。実際の平均値と意識の中での平均値にはややずれがあり，自分の身長を評価する場合全体との比較よりも理想との比較に基づいているとも考えられる。

高石は男子のピーク年齢・ピーク速度・ピーク時身長と終末身長との相関，女子においてはピーク年齢・ピーク時身長・初潮年齢・初潮時身長と終末身長との相関を調査している[5) 6)]。その報告によると，ピーク年齢と終末身長，ピーク速度と終末身長の相関は低く，特に女子の場合ピーク年齢・初潮年齢とも終末身長との相関はみられない。しかし，男女共ピーク時身長と終末身長の相関は極めて高い値を示し，女子では初潮時身長と終末身長の相関も高いと述べている。このことから，すでにピークを迎えた者にとってはこの自己評価が最終身長に対する評価に近いものとして受け取れる。

心理学的見地から，Fisherは興味深い報告をしている。自分の身長に対して過大視する人と過小視する人との間に性格的な違いがあるというものである[7)]。これは男性に対しての実験であったが，実測値よりも過大視する人は自分が他人より大きいということを心理的に納得させたいという欲求からそうするという報告である。身体は自分に心理的に近いので関心や欲求をありのままに投影するスクリーンの役を果たすとFisherは述べており，子供の身体意識が現実とそぐわないような時は常に心理的要素を考慮することも必要であると思われる。

理想身長についても青山の調査[3)]とほぼ同様の数値を示した。高校生，大学生の理想身長を調べた青山の報告[3) 4) 8) 9)]によると中学生の理想身長値が一番高く，高校，大学と学年が上がるにつれて理想とする身長が低くなっ

ている。これは，最終身長を迎え身長認識がかなりはっきりしてくるため，現実に則した値をあげるようになるためと思われる。

成長期である中学生が自分の身長に対して男女ともかなり不満を持っていることも明らかになった。自己評価を低い側につける傾向から考慮すると当然の結果ともいえる。男子とは異なり女子において，発育ピーク年齢が早い者に不満と回答する割合が高い結果となった。男子はピーク年齢が生理的に女子よりも遅いため，男子にとって発育ピークが早く起こっても特別な驚きがなく，ピークを早く迎えることが比較的否定要素ではないと思われる。しかし，女子においてピークを早く迎えることは両性を通じて早いピークであることを意味するため心理的にも動揺が大きく身長に対しての不満を抱きやすいのではないかと考えられる。

思春期における区分帯移動はかなりの発育促進，または発育停滞を意味している。満足群に上昇移動が多かったことから，大きな発育促進の経験が比較的身長に対する満足感につながる一因であると思われる。

Fisherは著書の中で身体部分があるべき大きさからみてその人の持つイメージに合わない時には慢性的不安のもとになると述べている[5]。中学生にとって今後の成長への期待はかなりできるが，著しくピークが遅れた場合や，低くなりたいと感じている場合など，本人の気にしている程度によっては適切な助言が必要であると思われる。

身長発育過程において，男子よりも女子のほうが不安を感じている割合が高い結果となった。Ashizawaらの調査[10]では7歳時，思春期，17歳時の成長曲線上の区分帯経過について報告しており，思春期に区分帯移動は多いものの，7歳と17歳においては同一区分帯を通過する者が多数を占めるという。このことから，13歳時において7歳時と同一区分帯を経過しなかった者についても今後同一区分帯に変化していくと十分考えられる。

不安を持つ児童，生徒に対しては，身長発育に医学的な問題があるかをまず判断しなくてはならない。低身長の場合，下垂体性小人症，甲状腺機能低下症，ターナー症候群，主要臓器異常による発育不良をはじめ，心理社会的な要因でもたらされる愛情遮断性症候群なども考えられるが，原因が見つからない成長障害が最も多く背が低い人の70～80％は体質性低身長であるといわれている[11]。学校現場で問題になるのはほとんどこの場合である。また，高身長の場合本人はあまり気にしないことも多く，異常が見逃されがちである。成長曲線を描き－２ＳＤ以下の者，＋３ＳＤ以上の者は受診が必要とされている[14]。今回の調査結果でも明らかなように，平均的な発育ピーク年齢，最大発育量であっても発育過程において不安を抱く者がかなりいる。医学的問題がない子供に対しては，本人の成長曲線を実際に書かせてみることはかなり有効であると思われる。周囲の人達はそれぞれ月齢が違うこと，成長速度曲線のピークは個人差があるがピークの位置をそろえてみるとほぼどの人も同じような形の曲線を描く発育をすることなどを話すと良いと考えられる。また，実際の成長曲線のいろいろなパターンを集めておきその子供の発育に応じて似たような例を示すと良いと思われる。特に，今後の発育が気になると思われるので最終身長まで追跡できる成長曲線が望ましい。Tannerの早熟傾向の男子と晩熟傾向の男子の相違を示した成長曲線[12]は有名である。二人の男児は幼少期から12歳頃までほぼ同一の成長曲線を辿るが思春期での発育はかなり身長差が開き異なる発育をし最終身長は同じに至る過程が良くわかる。このような例は発育への不安を軽減すると思われる。さらに，両親の身長がわかれば，最終身長を計算し予測することもできる。これらの作業をとうしながら，身長に対しての理解を広げていくような働き掛けは大切である。

基本的なことではあるが，姿勢をよくするだけでもかなり堂々と見えるものである。逆に背の高い生徒が身長を気にして前かがみの姿勢をとらないように配慮したい。身長が大きくなりたい，小さくなりたいと訴える背景に何があるのか気にしておくことも忘れてはならないと思われる。

身長差についての意識でも男子と女子の見解がかなり異なった。この結果は，一般的に男性は女性よりも身長が高いと思われていることの反映ではないかと考えられる。男子は自分よりも高い者の身長が気になりがちであり，女子も男子の身長が高いのは当然のことと認めているのではないかと思われる。また，比較的男子は見下ろされて話すことには抵抗があるが自分が下を向くことは気にならず，女子は自分が見下ろして話をすることに抵抗を感じているのがうかがえる。他人の身長が気になる場合，心理的圧迫感を受けている，または心理的圧迫感を与えているのではないかと思っていると予想される。このような意識は円滑なコミニュケーションをはかる障害となりがちである。「気になる」と答えた者に対しては程度に応じて心理的圧迫感や劣等感を持っている可能性もあると考えておく必要があると思われる。

文部省による生徒指導資料[2]の中にも思春期特有の悩みとして，身体・容姿に関する悩みという項目が設けられている。身長発育の遅れが自己肯定感に影響を及ぼすのではないかと考え調査したところ，未発現群に自己否定感が強いとの予測とは異なる結果となった。中学生では身長発育への期待はまだ大きく，ピークが遅い者でも個人差を受け止め直接自己否定感に繋がっていないと考えられる。身長に関する悩みが劣等感へと移行していくのは最終身長に至り，それをどう受け止めていくかに関わっているのかもしれない。自己否定感が身長発育のみの影響だとはいえないが，未発現群に否定感を持つ者が数名はいたことからこれらの対象には個別的な理解が必要であると思われる。

子供の身長発育評価をする際，全国あるいは都道府県別の平均値との比較によって優劣をつけようとしがちである。また，以前の健康優良児表彰制度は大きいことが良いことであるという意識を助長してしまったようだ[13]。しかし，体格が大きいことに価値があるのではなく，個人の年齢に応じた発育経過を辿っているかどうかが本当の評価に値すると考えられる。平均値の比較から得られる評価も大小の判断であり決して優劣をつけることはできない。学校で毎年行う身体計測において，大小に価値判断はつけられないという意識づけが必要だと思われる。子供達の身長に対する関心は高いことを活かし，教育的意義を含めた身体計測の実施が望まれる。

また，身長計測値は発育異常の発見，体重と合わせて肥満度の判定，机や椅子の適合判定に用いられているが，小学校から毎年継続的に記録された貴重な個人の発育資料であるにもかかわらず，縦断的データとしての利用はあまり行われていない。学校における保健室の役割が個々に応じた健康管理の推進や医療機関に身体発育情報を提供できる場として果たしていくためには，横断的データよりも，個人の縦断的データとしての重要性が増すものと思われる。

例えば，身長の発育状態と性発達とは密接な関係があるにもかかわらず，日本では切り離して考えがちである。子供の性発達度合いは体格の成長を知るのと同じ位重要なことであるがその把握は難しいため子供の訴えを待つ場合が多いと思われる。思春期遅発症の受診もアメリカでは性発達がないことが主訴であるケースが多いのに対し，日本では低身長が主訴である。このことからもわかるように性発達について日本では隠され，本人の意識においても外見上の発育が問題とされがちである[14]。思春期発育スパートと性発達度は常に平行して生じていることから身長の縦断的データを性発達の指標として活用していくことも重要と思われる。女子においては身長発育と初潮年齢についての研究資料は多く比較的利用されているが，男子における資料は少ない。Tanner による身長発育スパートと性発達の関係を示したデータ[12]はイギリス人のものであるが1年早めると日本人の平均的発達として利用できるという[13]。性発達において子供の心理的不安は十分考えられることであり，身長データから各子供がどの程度の性発達であるかを予測し，心得ておくことは児童，生徒自身を理解する上で役立つと思われる。

さらに，身長と座高の計測値を使い，座高発達と下肢長発達の割合をみていくと身長発育の進度をより深く把握できる。健康診断票の縦断的資料の積極的な活用が望まれる。

V．まとめ

中学2年生男子103 名，女子95名の身長に対する認識と成長曲線をあわせて検討した結果，以下のことが明らかになった。

1）身長に対しての自己評価は高い側よりも低い側につける者のほうが多い。理想とする身長は男子 178.5cm女子 164.8cmであった。

2）現在の身長に不満を持つ者は57～61％であり，現在の身長が低い者，発育ピーク年齢の遅い者，最大発育量の小さい者は不満を持つ割合が大きい。

3）最大発育量において平均以上の伸びを示した者は身長の伸びた時期を把握している割合が大きい。

4）身長発育過程において，女子は発育が早い場合，遅い場合ともに不安を抱くのに対し，男子は発育が遅いことによる心配がほとんどである。

5）身長差意識は自分よりも身長の高い者に対して感じている割合が大きく，低い者に対しては男子よりも女子

のほうが意識をしている。

6）現在の身長が低い者，発育ピーク年齢の遅い者が自己に対し否定感を多く抱いているとはいえない。

中学生はまだ発育途上であり今後の発育によって身長に対する認識も変化していくと思われる。学校現場において身長発育に関して知識を深める機会は少ない。身体測定のみならず，自分の発育を知り，個人差を理解していく場を積極的に設けていくことも必要である。調査結果を活かし，成長曲線を活用して身長発育に対し正しい認識を育てていくことが大切と考えられる。

文献

1）高石昌弘：身体計測値からみた小児の成長・発達，小児発達科学別冊，第2巻：137～163,1986.

2）別所哲：思春期における生徒指導上の諸問題－中学校編，文部省，1974.

3）青山昌二他：中学・高校生の身長意識について，第40回日本学校保健学会抄録：225,1993.

4）青山昌二：女子大生の自分の理想とする体格，学校保健研究，20(4):196-200,1978.

5）高石昌弘：思春期身体発育のパターンに関する研究－第1報男子の身長発育速度および体重発育速度について，小児保健研究，26(2):57-63,1968.

6）高石昌弘：思春期身体発育のパターンに関する研究　－第2報女子の身長発育速度，体重発育速度および初潮年齢について，小児保健研究，26(6)280-285,1969.

7）S.Fisher：からだの意識，誠信書房，1979.

8）青山昌二：大学生の体格・体力とその意識について，体育の科学，22(3)176-183,1972.

9）松浦賢長：女子大学生の体格意識に関する研究，小児保健研究，47(6)673-676,1988.

10) Ashizawa, K. ,Tkahashi, C. & Yanagisawa,S: Stature andbody weight growth patterns from longitudinal data ofJapanese childrenborn during world war Ⅱ.J.HumanErgol. 6 : 29, (1977).
文献1）より引用

11) 田中敏章：低身長（いわゆる小人症）の評価と成因，馬場一雄編，小児医学，20，低身長・やせ・肥満，医学書院：553-572,1987.

12) J.M.Tanner:Foetus into Man-Physical Growth from Conception to Mturity-,前川喜平監修・熊谷公明　訳，日本小児医事出版社，1983.

13) 松本健治：身長計測データの利用をめぐって，第35回日本学校保健学会抄録：100-101,1988.

14) 横谷進：「体と性の発達と異常」－体の大きい子・小さい子，性発達の早い子・遅い子－，第182回学校保健セミナー講演資料：1-11，1993.

15) 森田憲導：身体発育と遺伝・環境要因，ぎょうせい：p386-387，1989.

16) 坂本伸之取材：足・足腰・姿勢，Utan，13(1)：24，1994.

17) 高石昌弘：身体発育の動向，学校保健研究，23(9)：402-406,1981.

18) 井上義朗：思春期の成長と体型，小林登編，新小児医学体系第27巻，中山書店：43，1982.

19) 高石昌弘：発育パターンの個人差と年次的推移，小児科ＭＯＯＫ No.6小児の発育障害，金原出版：1～15，1979.

20) 高石昌弘，樋口満，小島武次：からだの発達－身体発達学へのアプローチ，大修館書店，1981.

21) 高石昌弘：思春期身体発育のパターンに関する研究－第3報身長発育速度曲線のパターン特に思春期急増の開始と発育終了の年齢について，小児保健研究，29：259-263，1971.

22) 太田鐵男：身体イメージ，児童心理，44(6):50-55，1990.

23) 岡島佳樹：定期学校健康診断の実施問題に関する調査，学校保健研究，33:384-390，1991.

24) 武田真太郎：検診項目の再検討「身体計測」，健康教室臨時増刊「健康診断再考」，36(16)，44-46，1985.

25) 佐竹隆：身体計測項目の見直し，第35回日本学校保健学会抄録：102-103,1988.